

木材資源のリサイクルにかかるユーザー懇談会会議録

1.日 時：平成 18 年 9 月 6 日(水)

第一部マテリアル関係懇談会 13：00～14：55

第二部サーマル 関係懇談会 15：05～17：00

2.会 場：朝日生命ビル 17 階会議室(東京)

3.出席者：別添名簿のほか、随行者として

石田信正氏(東海協会副会長)及び中平有次氏(住友林業(株))が当日参加

4.会議の概要

彦坂連合会理事長及び姫野日本繊維版工業会専務理事の開会挨拶に引き続き、別添次第により出席者の自己紹介及び資料説明の後、自由討論を行った。

その主な意見等の概要は次のとおりである。

・第一部マテリアルユーザー懇談会

<彦坂連合会理事長挨拶要旨>

バイオマス日本の実現及びリサイクル社会の構築に向けて、木材資源の分野で徹底したリサイクル推進を図るために組織を挙げて貢献していきたい。

そのためには、供給者と需要者（ユーザー）との情報交換及び連携強化が重要で、本日はその初めての会合としてユーザー代表の皆様と自由な意見交換を行い次に繋げる有意義な懇談会にしたい。

<姫野日本繊維板工業会専務理事挨拶要旨>

工業会はボードメーカーの集まりで、来年 50 周年を迎える。この間、一貫して木材のマテリアル利用を追求し、今では解体木材が原料の中心となっている。今後ともマテリアルリサイクルを強力に推進していきたいので協力をお願いしたい。

— 同氏の資料説明の中での意見等 —

ボード全体では解体系資材が 61% 占めており、パーティクルボードでは 75% を超えている。しかし、近年木材チップが燃料に流れて手に入らない状況に危惧しており、業界を挙げて環境宣言をするなどマテリアル拡大の運動を展開している。

ドイツでは、バイオマス発電に木質チップが集中し、マテリアル利用木材が激減するなど大きな社会問題となった。

国において林地残材対策などを強化していただければありがたい。

～ユーザー側意見要旨～

< A 社 >

木材チップの需給面で構造的形態の変化が起こっている。

木材資源リサイクルに当たっては、マテリアルを優先する必要があるのではないか

特に、優良な柱材等がサーマル燃料に向けられているのは問題だ。

ヨーロッパ等の例に見られるように、

・排出事業者(ハウスメーカーなど)→・チップ業者(産廃中間処理業)→
・ボード等製造メーカー→・ハウスメーカーなど(排出事業者)と言う
循環リサイクル連帯システムを作っていく必要がある。

<B社>

S53年以来、自社破砕でリサイクル材の確保に努めてきたが限界がある。
マテリアル利用・サーマル利用とも供給者との共存・共栄が重要である。

<C社>

高萩・岡山工場ともマテリアル及びサーマルの両面利用を行っており、その
中で品質区分し有効利用を図っている。原料はおおむね確保できている。

<D社>

確保対策として、福井工場では計画的な備蓄をしてきたが底をついてきた。
また、岩国工場はボード用チップが逼迫し不足しているので関東・関西から
も船で運んでいる。

さらに、良材が燃料に回ってしまっており品質が落ちてきている。
逼迫しているマテリアル用材の確保対策が緊急の課題で危機感がある。
マテリアル用にまわす為に何が問題かを両方で検討する必要がある。

現状では、燃料チップとボードチップの値段調整は困難である。

<E社>

火災で昨年1～8月運転休止していたこともあるが、チップの需給は様変わ
りして確保が難しくなってきた。

そのため、九州以外の地域まで足を伸ばしている。

～供給者側意見要旨～

<NPO 北日本協会代表理事 鈴木隆氏>

チップ等木材資源の需給には地域性があり、北日本管内では紙・ボード・燃
料のほか炭・肥料・敷料等多様であるので、協会内にユーザー部会を設置し
定期的な話し合いをしている。その結果、輸送関係も含め供給先の選択肢に
もなっている。現状では、ボード用・燃料用の価格は僅差で、ボード用が有
利に働くことを期待している。

規格・品質は供給者の責任として重要であり、これが価格に反映されること
で大きな励みとなる。

<東海協会会長 山口昭彦氏>

供給者側も資材の確保が課題である。

可能な限り柱材及び梁材はマテリアルリサイクルに向けているが、供給価格
があたり 2500 円程度下落している。価格面でマテリアルとサーマルのバ
ランスが重要である。

供給者としても、モデル的に林地残材の確保に向けて地元森林組合等との連
携を検討している。

新規参入者も多く現場の熟練者が不足しており、競争も激しいので安易に燃
料に向けられている状況で大きな課題である。

<NPO 中四国協会代表理事 片岡重治氏>

チップ製造の立場では、品質の仕分けに手間がかかり価格に反映されていないとどうしても燃料にまわってしまう。輸送費の検討も必要である。

<九州協会会長代理 中山稔氏>

九州の例としては、本日出席の太平工業さんが選別機を設置して大量備蓄されてきたので供給者は安心して提供できた。これからは運賃の関係で取引はよりローカル化するのではないかと

別件であるが最近の新たな情報として、合法木材供給事業者認定制度が施行されチップ業界にも及ぶと聞いて不安になっている。

- ・ 第二部サーマルユーザー懇談会
- ・ ～ユーザー側意見要旨～

<F社>

勿来・石巻・秋田・富士・岩国・吉永の各工場照会の中で、灰中の塩素や排水中の重金属問題、石炭等との木屑混焼割合(CO2 関連)、チップと生木確保対策など広範にわたって主に品質の問題が提起された。

特に、灰のセメント会社引き取り基準の塩素分1000ppm以下にするため洗浄施設を設置しているなど。

例として、漬物・味噌・醤油樽等は塩素濃度が高いため除外して欲しい。

ユーザーとしては、燃料となるリサイクル素材も選択する必要がある。

今後の木クズ燃料の確保にあたり抜根材もバーク材も対象に考えて行かざるを得ない状況にある。

クレゾール塗布された枕木などリユースが望ましいものを燃料にする場合は品質検査をして欲しい。また、松くい木などの利用は重要で途中放置されないよう補助金の有効利用をお願いしたい。

<G社>

木質チップのほか石炭・RPF・タイヤチップが主燃料だが、工場内発生廃棄物(故紙等)や生木・剪定枝など燃焼可能なものは全て利用している。

事業推進にとって今後の木クズ不足を懸念しており、全国の地域別に木屑等の発生状況及び利用状況をもっと明らかにして欲しい。

<H社>

茨城と岡山工場ボードつくりと燃料としてのチップを利用しているが、マテリアル利用を基本に優先使用し、残りをサーマルとして利用しているのでまったく無駄がない状況である。

しかし、年間3万トンの木クズ燃料不足で重油も燃している。

<I社>

売電事業を目的に設置されたファーストエスコグループの日田・岩国・白河ウッドパワーの稼働状況について説明があり、3工場とも生木50%利用されていることから確保問題・塩素問題は他社より少ないが、ボイラーに悪影響のある付着土砂対策等が必要との説明があった。

発生量や市場の明確化が要望された。

< J社 >

市原グリーン電力(株)へのチップ等燃料の新供給体制について説明があり、金属等の排除など品質管理の重要性とモデル供給体制の維持が強調された。

～供給者側意見要旨～

<北日本協会代表理事 鈴木隆氏>

品質はユーザー先によってケースバイケースで、利用形態に応じての話し合いが重要である。

ユーザーは安くてよいもの使いたい。落とすところは品質であるだろうから未利用資源も含めて市場の明確化とルールづくりが重要と考える。

<関東協会副会長 矢嶋明氏>

需給調整は、供給者側のチップ生産が過剰気味のほうがやりやすい。

現状の需要拡大の中では、いかに多くのユーザーに必要量を供給するかが問題となっている。

そのため、関東協会は本日付けで（午前に）需給調整委員会を立ち上げたところである。この中で産廃木屑はもとより一廃や生木の利用可能データも集めたい。

商社の立場から見て、輸送費の高騰により流通のパイプに変化が出ており、中間処理工場の分散化が進んでいると思う。

<東海協会会長 山口昭彦氏>

供給者として CCA 防腐剤やペンキ、バークにいたるまで品質には注意してきたが、塩素問題には改めて注視したい。

<東海協会副会長 石田信正氏>

品質問題は今に始まったわけではなく数十年前からの積み重ねで現在の水準になっている。S60年頃までは木質燃料もtあたり9000円位の取引が現状では0円になっている。需給がやや乱れてきているので重油の高騰などを勘案し取引価格も修復する必要がある。

第一部及び第二部共通事項

<林野庁木材利用課リサイクル係長 山之内弘幸氏>

今日は、勉強のため参加させてもらった。

マテリアル・サーマルを含め、バイオマス利用の促進は極めて重要課題で林野庁としても林地残材等の利用拡大に向けて来年度予算の要求中である。ただ、補助金による支援制度は、ランニングコストへの補助は困難であるので、林地残材の利用推進に向けた新たな仕組み作りのための実証事業を想定しており、その実証調査にかかわる経費の支援を考えている。このようなソフト事業の推進を軸に木質バイオマス利用をより重点化したいと考えている。今後ともご協力をお願いしたい。

＜(株)日報・アイビー記者 鎌田修平氏＞

木材資源のリサイクル関係を主に担当しているが、全国的に木屑の破砕業は増加している。昨今、リサイクル意識の高まりと需要増によりチップの流れも変わってきている。

本日はオブザーバとして参加させていただいたが、本日のようなトップクラスによる需給関係者の意見交換会は画期的であり、記事に反映させたい。

—講評—

第1回目のユーザー懇談会をマテリアルとサーマル部会に分けて開催し、全国の代表ユーザーと全国の供給組織の代表者との意見交換ができたことは極めて有意義であった

しかし、両部会とも初めてのケースであったことから各2時間では、生産・流通・販売に係る共通課題の原料確保問題や取引価格問題など両業界が協調して問題解決に当たるような核心の討論までには至らなかった。

バイオマス日本の推進及び資源循環型社会の構築に向けた両者の役割は、ますます重要になっており、今後の連携強化が不可欠である。

今回は、各代表者5名程度としたが、第2回目以降は、シンポジウムやパネルディスカッションなども視野に入れた定期的な開催が望まれる。(中川)